

## トークセッション

### 『未来を描くコミュニケーション・プラットフォームの創り方』

飯島 ありがとうございます。なかなかユーモアのあるサイトを見て、和んだところで……。先ほどの「ヒューマンクロック」は面白いなと思っていて、先ほどのフォト日記でここにアクセスすれば、さっきのアクティビティがいつべんに出来ちゃうんですね。お試しくださいます。今日のセッションを聞いて、「ああ、面白かったな」と思ったら、フォト日記、早速応募していただくと。さっきよりももっとイケテル表現で何時何分というのをみんなでアップしたら、この会場の人、来ていただいた方々が連帯するかなと思っています。

昨今のウェブのブームや、それからNGOやNPOが元気なのは、「つながりたい」という感覚で素直にやっているところが、やっぱり伸びている、元気だなと思っているんですね。サイトのデザインにしても、それから先ほど環境 goo 大賞やってきたんですけど、何が分岐点かというのが明解に見えてきたのは、非常に厚化粧的なメイクアップ型で「デザインきれいだね」というところから、「本当につながりたいんだ」とか「あなたのこと知りたいんだ」とか「あなたと話がしたいんだ」ということが明解に出ているのが、大企業、中小企業、NPO、NGO、個人という部門があったんですけども、共通していたといえると思います。実は今年の環境 goo 大賞は中小企業部門が一つも候補なしという、歴史上始めて以来のことが起こったのです。ちょうど中小企業の方々は、大企業の真似をしようと思っているところや、個人のブログによる人の息づかいを感じるものの狭間であって、表現に苦しんだ 2004 年だったのだらうと思います。

だんだん行く年来る年みたいな話になるので、お一人おひとりからお話を聞いていきたいと思っています。活動を通して、今日のテーマでもある「つながる、見つける、育つ」というキーワードがありますけど、もう一度先ほど話し足りなかったことを。例えば、私も青森へ風車を見に行っ、風車を見上げて「めんこいな」という本当に「めんこいな」という感情を持つことが出来ました。普通風車だけ見てニンマリ笑って「めんこいな」なんてこの人おかしいんじゃないかな、という感じがありますけど、皆さんぜひ行っていただくと、なぜ「めんこい」という感じが、風車という生き物でないものを見てもわかるかということ、感じていただけるかと思います。環境の話や社会的責任の話は堅くなりがちなんですけども、まず感じてから、ということで三上さん、いいですか？ 風車を見上げて「めんこい」という三上さんからぜひお話を伺いたいです。お願いします。

三上 ちょっとまた宣伝を（笑）。この赤いチラシにりんごのことが書いてあるんですけども、さっき言った市民風車ブランドというのをつくろうということで、毛豆の次にりんごを売ってみようということでやっているんです。今年りんごを売るにあたって、本当の贈答用のりんごというのと、家庭用のりんごと普通言っているりんごをどう売ろうかという話になりました。農家が物を出荷する時にけっこう困るのが、消費者の人が真ん丸で真っ赤なりんごは高く買うけど、ちょっと形が変わっているとか、ちょっと色付きが悪いのを売るのに困るっていうことがあるんですね。これは消費者の人がある意味で物を買っている人に「そういうもんだ」と教え込まれている、例えば曲がったきゅうりは買わない、でも本当は食べてみると同じ味。りんごというのは

1本の木から贈答用でとれるりんごの個数というのは1割2割しかないんです。残りの分は家庭用みたいな感じになる。我々が先ほど申し上げたように農家の人自立して生活していく、あるいは我々が消費者も含めて農業と一緒に創る、あるいは支えるということから考えると、そういうものをどう売るのがかっていうことが1つ非常に重要なことです。その時に、飯島さんだとか最近お付き合いをしている東京の人たちに、こういう状態なんだけど何かいい名前がないかな、っていうふうに考えて、ついたのが「めんこいりんご」っていう名前だったんですね。いわゆる家庭のものを「めんこいりんご」って名前をつけたんです。後で聞いたら、飯島さんは「三上さんが風車を見てめんこいなって思うのが浮かんだ」というお話をしていたんです。そういうコミュニケーションの中からそういうものが出来たっていうことが私は非常に嬉しかったですけども、我々はこのりんごを、あるいは毛豆っていうものを売る時に、先ほど申し上げた900名の方には、例えばニュースを送る時にこういう情報を紙で送ることによって、一定の情報を流すことが出来るんですけど、やっぱり遠くにいればいるほどなかなか風車を直接見ることは出来ないし、我々が話をすることが出来ないの、なんとかネットでそういうことが出来ないかということを考えておりました。実際我々は1億7800万円お金を集めたって言ったんですけど、県内で鱒ヶ沢町枠、青森県枠と集めた他に、全国枠っていうのがありまして、このお金を集める時にはかなり苦労しました。なるべく私を県外に呼んでいただいて講演するとかお話をさせていただくようなこともしたし、テレビで取り上げてもらったりっていうこともあったんですけど、やはりその時にもっとネットを上手く使えばいいなということを実感してまして、最近、今言いたいいわゆるコミュニケーションを、飯島さんとこういうふうにやるのと、これをネット上でどうやるのかということに私自身は非常に興味がありまして。おびネットの話とかその辺も興味がありましたし、JFSさんとかThink the Earthさんとかのですね、そういうものを勉強したいということをおまじ申上げておきます。

**飯島** 津軽弁いいですね、優しくて。もうちょっと裏話を申しますと、このりんごの販売についてもう数日しか時間がなくて、「いい名前がないか」というメールがくるわけですね。メールを出した三上さんの相手というのは、青森の風車に行ったツアーグループで、その中には某広告代理店のマーケティングのプロフェッショナルですとかいっぱいいいたんですね。この話はプロがっていう話じゃなくて、なぜプロが動いたかという話をしたい。それはやっぱりみんな風車を見る、風車を見て感動した実体験なんですね。コミュニケーションをつくるっていう一番最初に大事なことが、先ほど言った「感じている」ということなんです。僕らは普通の話だとかこういう賢いネーミングをつくってこういうふうにやったらってスマートに説明をするけれど、アイデアの原点は「感動」だと思っています。ですからはっきり言って三上さんと一緒に見た、あの寒い風の中で回る風車がアイデアの発想の原点で、そういう実体験があって引き金になってメールが来た時に、みんながバツとそれに応えたと、応えたくないと。それが三上さんの期待に、質問に、真夜中から昼間まで会社の時間を使ってかなりアイデアをもらったりするわけですね、それはJFSでもそうだと思うんですけど、会社の時間を越えてみんながアイデアを持ち寄った。そのプロセスはやはり僕は実体験をしていますし、物凄く感動をしました。嬉しくてアイデアを出していくんですね。片方がアイデアを出すと、ネーミングはこうじゃないか、ああじゃないか、こういう観点もいえるんじゃないか、まさにマーケティングからコンセプトワークから、ものがパパッと決

まっていってしまうということです。駄洒落の部分も含めて、それこそインタラクティブな関係、つまりITだからということじゃなくて、個々の人間がインタラクティブであるということだと思えます。そのために共通体験として、やはり風車を見ようと思えますし、今日たまたま皆さん一緒にいますから、必ず風車を見てください。鱒ヶ沢、三上さんに連絡していただければ見ていただける。人生たぶん変わると思えます。

なんて大袈裟なことを言っていますが、ニコニコしている澁澤さんに森の聞き書きの話をちょっとしていただきたいと思えます。

**澁澤** 今「つながる」という話をいただいたんで、本当に思いつきで。聞き書きって何がつながっているのかなってことを思ったんですね。ふと思い出したのは、去年の秋口にある神奈川県の小学校の先生が、うちのNPOにお越しになって、ITの話とはちょっとずれるんですけど、父兄参観をしたときに必ずクレームがくる一つの問題があると。それは、給食の時間に先生が「いただきます」といってみんなで食事をする、それを見ると必ず何割かの父兄が学校に翌日苦情がきて、「給食費を払っているのは自分たち父兄なんだから、先生が『いただきます』って言わせるのは何ごとか、っていう苦情がこの頃毎年必ずくるというんです。「それにどう答えたらいいでしょうか」という質問だったんですね。実はその繋がるということなんですが、よく持続可能社会とか、循環型社会っていいですね。何が循環しているかって、けっきょく「いただきます」というのは、人間っていう生き物は何か他の物の命を食べないと生きていけないわけですから、他の生物の命をいただくということに対して「いただきます」です。基本的に循環型社会というのは、物質が循環しているんじゃなくて、命が循環している社会というのをどう実体するか。ようするにどう実感するかっていう部分で、やはり「いただきます」という行為なんだと思うんですね。

それと同じように、例えば高校生たちと森の名人たちとの間っていうのは、先ほどコミュニケーションっていう話ができましたけど、名人たちは、例えば植物の名前をたくさん知っているわけでもなんでもないんですよ。植物の名前なんて全然知らないんですね。これは木だとか草だとかいう。だけどそれぞれの木がどういうふうに使えるのか、これは繊維に使えるのか、この根っこは薬に使えるのか、あるいはどの時期にとると非常に有効に使えるのか。あるいは熊の仕掛けを作る時にどの木は上に使ってどの木は横に使わないと熊は入らないのかとかですね、そういうことは非常に良く知っているわけです。つまりね、自分たちと熊と、あるいはその間に入る自然と草との区別がどこでついているのかが、よくわからないんですね。よくわからないというのは、自分の命の延長に植物の命があって、その向こうに熊の命があるというのを、それを高校生たちが見るんです。

よく僕たちの時代っていうのは学校教育では自然を大切に教わります。自然っていうのは、人間社会の向こう側にあるものですね。それは明らかにヨーロッパ、欧米型の発想なんですけど、日本はもともと自然じゃなくて「自然(じねん)」の世界ですね。自然(じねん)の世界っていうのは「自ずから然り」ということですから、要するに命がずっとつながっているその一部分に自分たちがいるっていうことなんです。ですから、むしろその進歩だとか発展というのが価値観ではなくて、不変であって調和であるというようなことの方が価値観になってくる。つまり、名人たちの生き方っていうのは自分たちの命が相手の命とも繋がっているし、自分の命を支えて

くれる、先ほど「へその緒」という話をしましたが、自分の命を支えてくれる自然にもつながっているし、自然のそのまた向こう側の自然にもつながっている。ある意味では非常にガイア的なんですけど、地球全部が瞬時に繋がっている、繋がっているからみんな「生きている」と言わないんですね。「森に生かされている」という言葉が出てくる。つまりその中で、自分が一部分としてつながることで、自分が生きているという意味がある。自分が生きていないと次が繋がっていかないわけですからね。そういうような概念っていうのを何とか社会の中の価値にしていきたい。

たしかにネットというのは、私はまさにその部分だと思うんですよね。どうやってそのある意味では地球という非常に複雑な「複雑系」を持った一つの生命に、ネットでどう血管で血を流しながら、一つの新しい、全部が繋がっているという概念をつくれるのかと。それがさっき言った、例えば、昔の人は言葉がなかったかも知れない、昔の人なんて言っちゃいけないですね、愛だとか許したとか感謝だとか、これ、今まで宗教用語って言われていたことなんだろうけど、基本的にその部分っていうのが核、そういうものが命の鼓動になって繋がってくるんだと思うんですよ。そんなものを大人たちが、じいちゃんと高校生たちが恥ずかしがらずにしゃべっていると僕たちが当たるとね、僕たち背広着てこんなことやっている人間たちは、会社にいる時もNPOやるときもですね、朝行って「まず愛について話し合しましょう」なんて話は一回もないわけですよ。経営会議に出てこのプロジェクトは非常に感謝が溢れているかなんて、全然誰もしないわけです。だけどそれが当たり前の価値観につながっていかないと、本当に命が繋がっているということを実感する社会なんて作れないんじゃないかと思うんですね。

その時に私どもはネットっていうのはどういう、さっき「血管」という話をしましたが、どういうものを流していけるのか、その中で「聞く」ということは、命全部を受け止めることですよ。つなぐことと受け止めること。その両方の行為ということがとっても重要になってくるんだろうな。またこれからそれを社会にどう価値づけていくかっていうことが、聞き書きっていうこと自体をずっと続けていくモチベーションにつながっていくのかなっていう感じがします。

**飯島** ありがとうございます。僕も毎日愛を語りたと思っています。続いて多田さんですが、一緒に青森に行きました。青森に行った多田さんは少年のように風車を見て喜び、森を見て喜び、白神にも行ったんですけどね、多田さんのそういうところはもちろん普段お付き合いしてよくわかるんですけど、ああいう回路に入るとですね、自然の回路に入るとよりお茶目さが出て良かったなと思っていて。日頃ある意味で堅いといわれる環境の話をしていて、今の渋澤さんのお話のように、自分の境目がとれていくっていう感覚と、そういうことをこれからネットや仕組みや活動で展開していくと思うんですけど、多田さん、先ほど言い忘れていたことがいくつかあると思うので、補足してちょっと。

**多田** 飯島さんが最初に「命の潮流に戻って行くんだ」ということだとか、50年エンパワメントの話がされていて、そこを足掛かりにいるんな人の話を聞いていて、、やっぱり上田さんのサイト面白かったですね。あれがなんで面白くなっている理由を僕なりに考えてたんですよ。3つぐらい思ったのは、あれって結局スナップショットの羅列なんだけれど、それがありとあらゆる世界から届くっていう、堅い話をしちゃうと、持続可能性の中で「多様性」という概

念があるじゃないですか。多様性が価値だみたいなことを言われるんですけど、それってなかなか概念的に理解出来ないですよ。でも、ああいう絵のシリーズを見せられると、それが瞬時にわかるっていう、多様性がそこにあるぞっていうことと。そこに時計、何時何分っていう時間が貼り付いているという、「時の流れ」が感じられるということと。あれってみんないい顔していますよね。猫までいい顔しているなと思って、「生きているぞ」っていう叫び、命の叫びみたいなね。その3点セットがあるんで、素晴らしいのかなと思っていました。

だからああいう本当に舞台裏自体は単純なあれを回しているだけだと思うんですけど、ああいう仕掛けを今後JFSのネットでもなんか上手く仕掛けて、ワクワク感とかより楽しさみたいなことを仕掛ければ、裾野が広がるかなということをつらつら考えていました。

**飯島** そうですね。頬がゆるんでいる多田さんの顔を見てもホッとしますが。実は私も車のデザインのコンセプトをやったりするときに、ゴールが普通は造形がきれいだとかウェブのデザインでもウェブがきれいだっていうふうに考えていくんですけど、実は一つ物指しがありまして、「ココ(頬)がゆるむ」っていうのが一つの物指しなんです。デザインとか言葉を通して、それから体験プログラムを通して、三上さんは今度は新しいりんご、りんごを一つ齧ったときに頬がゆるむ、ココが本物へのアプローチじゃないかなと。長らくデザイン教育や私たちの教育の中で何かたくさん知識を知っていることが目標だったり、たくさん持つことが目標だったりしてますが、ここにいる一人ひとりの方々が、皆さんが頬をゆるますっていうことをゴールにご自身の仕事を考えてくれたら、少し世界は変わっていくんじゃないかなというふうに思います。

先ほどの上田さんが紹介してくれたサイトはまさにユーモアやつながりや一人ひとりの鼓動が生き生きと描かれている。あれを見るとなんとかふわんとした気持ちになったり、三上さんの言葉を聞いてもふわんとした気持ちになる。やっぱり頬がゆるむような仕事っていう目標を。または自分が学校で勉強していることも、勉強していることが本当に人の頬をゆるませることにつながっていくのだろうか日々考えることによって、だいぶデザインも、それから皆さんの仕事も豊かなものになっていくんじゃないかなと思います。

すごく素敵なサイトを紹介してくれた上田さん、日々考えていることをもうちょっと。考えないでやっているんですけど。また裏話をしますと、最近ちょっと体を壊しまして、日々大変な多くの仕事をされているんですけど、今みたいな人を和ませるっていうところで、そういうところに上田さんの心のメーターはふれていると思うんですけど、どうでしょう。

**上田** そうですね、さっきのサイトは皆さんうけてくれて嬉しかったです。あれね、ぜひ見てほしいんですけど飽きないんですよ。画像を小さくして、自分のデスクトップの好きなところに置いておくような機能もついていて、けっこう心配りが出来ている。最近アップロードされた写真を順番に見るっていうのもあるし、全部からランダムに表示するとかいろんな、最近「ヒューマンカレンダー」っていうのを始めたらいい。なんか盛り上がっているんですけど。

あれはちょっとユーモアがあって面白かったんですけど、他にも例えば、地球上に東経何度、北緯何度何分っていうのがあるじゃないですか。それを1分までかな、やるとですね、間が何キロか離れたグリッドの、ちょうど緯度経度が整数で終わるところに立って写真をアップするっていうプロジェクトもあるんですよ。全世界のリアルな地図をつくっちゃおうっていう。面白いんで

すよ。砂漠地帯は全部同じ風景だから色はみんな一緒なんですね。たぶん日本でやるとけっこう多分緑が多いね、やっぱり森の国ですからね。そういう写真が並んだり、都市部はもう少し灰色な感じになったりとか、すごく面白いことをやっている人たちがいっぱいいるんですよ。

僕は今日多田さんと2人で話をしている、1つJFSとの共通点というのは、Think the Earthもそうなんですけど、日英のバイリンガルで頑張ってる。JFSさんはそれが一番重要なポイントだと思うんですけど、僕らも頑張っているんですけど、ネットの良さっていうのは、同じ思いを持った人が、地域とか関係なく全世界探し当てることができる。気づいた人がアクセスしてくれる。さっきはカメルーンから来たなんていう話もありましたけど、繋がることのできるわけですね。しかもそれが瞬時に繋がると。しかも個人個人が繋がる。「私は企業でございます」といって来る人は1人もいなくて、どこそこの誰だれです、というところから必ず来るわけで、個人が繋がるんですね。実際にThink the Earthもそうやって、メールを送って来てくれたことでいろんなことが始まったりとか、っていうことがやっぱり起きているんですね。その可能性が全世界に広がっていくということが、僕はやっててすごく刺激があります。

それとさっきの多様性の話と差異の話。わかんないけどこれまでの人類はなんとなく「あいつと違う」っていうことがすごく大事というようなことだったと思うんですけど、それも大事かもしれないですけども、むしろ同じっていうところが、ぜんぜん肌の色が違う、年齢が違う、性別が違う、もしかしたら種別が違うと、いうところでも同じ何かを共有することが出来るっていうことを広げていくことが出来る、発見していくことが出来る。インターネットって、ほとんど先進国ばかりなんですよ、つながっているのが。今、6億人になりましたけど、これからアフリカとか南米とか、いっぱいつながってくると思うんですよ。今、とりあえずツールは英語で、共通言語として英語をとりあえず使うことになるかもしれないし。さっきのサイトで一つ面白いのは、ノンバーバルなんですよ。言葉を使ってなくて、何か共感が起きているという。そういうこともできるんです。それを何かもうちょっと僕らも意識的に、インターネットみたいなものとか、つながるといふことについてもう少し深めて考えてみたいと思います。

**飯島** ありがとうございます。ノンバーバルというのは、言葉を使わないコミュニケーションのことですが、私たちは日頃は言葉を交わしながらも、相手の表情、色、着ているものとか、風景、そういうものから刺激を受けながらコミュニケーションしている存在なんですけれども、このへんに大きなヒントがあるかもしれません。JFSのサイトに色の展開をしたのは、JFSのコンセプトは、「日本の文化、日本の環境情報を世界に発信する」。それだったら色も輸出しちゃおうよ、と。日本の色を言えば、向こうはこの色は何色？と返ってくるわけですね。

それから多田さんもある環境誌に書いていた着物の話ですが、我々日本人が着物を着て海外に行ったときにももちろん「ファンタスティックな着物」と言われるんですが、「その色何ですか？」と聞かれるんです。そこである意味、双方向性が起こってくる。で、ノンバーバルなコミュニケーションもヒントだと思います。先ほどの話につなげるならば、頬がゆるむコミュニケーションになると思います。

続けて最後、時間があと20分ほどですので、将来の話を皆さんにさせていただきたいと思います。これから何をしてみたいのか、こうあったらいいなとか、未来へ向けてお一人おひとりから

話を聞きたいなと思います。明日からどうするか、でも構いませんし、2005年こんなふうになったらいいな、というところもあると思います。お一人お一人の言葉を聞きたいと思います。

三上　　ちょっと「育つ」と言う話をしてみたいと思います。

我々が風車を建てたのは、私の中ではやっぱり地域を変えたいとか、地域を自立させたいと言う気持ちがすごく強かったんですね。もちろん風車の建設も、これからもしていくんですけど。やはり重要なのは、地域の人たちの気持ちが変わっていく、ということだと思っています。

毛豆をつくっている木村才樹さんの話をしたいんですけど、木村才樹さんというのは自分の土地を40町歩耕作をしています。普通の専業農家で2、3町歩ですので、40町歩というのはかなりの規模です。その方は同時に有限会社をつくってまして、100町歩耕作しています。その方が我々の毛豆を耕作した面積は、7反歩、0.7町歩です。200分の1くらいしか耕作をしていなかったけれども、今年やっている中で一番気になったのが毛豆の畑だと。

なぜかという、食べる人の顔が大分見えてきた、ということです。普通、農家の方が何かを生産している時というのは、相手の顔、消費者の顔が全然見えないんですね。それがだいぶ見えてきたので、これは失敗したくないと。他で作っている品目っていうのは失敗した時はしょうがない、天候次第だというのがありますが、これは絶対失敗したくないと。そういうふうには生産者と消費者との顔が見えることによって、多分、食べるほうも美味しく食べられるし、作るほうも非常にやりがいがあって作られるということがあります。たとえば、彼は銀座に9月十五夜の夜、「風丸の集い」に私と一緒に来たんですけど、その時は東京の方々も集まってくれて、非常に銀座の人気者になって、「才樹さん、あなた銀座に来たらバッチリよ」と言われて、本人その気になって「そうかな」とすごく喜んだんですが、すごく磨かれて変わって行くという、成長するのが良く分かるんです。

彼が言っていることで我々に非常に響く言葉っていうのがありまして。彼は有限会社をやっているんですけど、青森県内で、我々が県から仕事をもらって、有休農地をテーマにワークショップをやった時、みなさんがいる前で、「我々の会社は、実はNPOみたいなものなんです。三上さんに騙されて、実はもうこんなことをしてるんです」みたいに。喜んで騙されてるということなんですけれども。そういうふうにして、非常に消費者の方々との関係、あるいは飯島さんとか、我々とつきあうことによって色々な人と知り合いになって、たとえば自分の農業経営をどうしていかうかと考えるようになるんですね。

地域のコミュニティというところでもおもしろい変化が出てきていると思うんですが、最近、町役場の農林課の職員の方が三上さんに是非会いたいと言うので、この間会って話したんです。その時何を言ったかという、「風丸」っていう、毛豆につけた名前が非常に売れてきまして、役場の職員の方が、「三上さん、風丸と言う名前を使って、鱈ヶ沢のみなさんにいろんなもの、毛豆を生産させたり、加工品をつくりたい」と。「風丸という名前を使わせてください」と言ってきたんですね。それで私は「それは駄目です」と。

木村才樹さんが我々と毛豆を作ると言った時に、リスクを取って下さいと言ったんですね。我々ももちろん迷惑をかけるつもりは全くないんですけども、仮に天候が悪くて全く採れない、あるいはいっぱい採れたけれど全く売れないという可能性があって、その時、100%こっちが責任持つと、相手は責任持たなくなるじゃないですか。だからリスクをちゃんとシェアしましょうと。

彼はそれを約束してくれました。周りの農家の人はそういうことをしてくれますかと聞いたら、「そういう人はいません、でも自分は面白いからやります」と言ってくれたんですね。

ここから先が多分、私は問題だと思っているんですけど、町役場の職員の方がそう言うてくるのは非常におもしろい取り組みだし、これを使って何とか町を活性化させようというんですね。そこまではいいんだけど、結局、名前を使ってぺたぺたシールを貼って、なんか売れるように思うところに、ちょっと問題があるってことなんですね。それを「一緒に作っていこう」ということを我々は言いたいんです。

ですからたとえば、木村才樹さんのところで生産の管理をきちんとやる、たとえば農薬をこういうふうにかける、出荷のときはこういうルールでやりますと。いうことをやったら、当然それは我々も一生懸命売りましょと。加工品つくるときも、毛豆を使った加工品をどんどんつくってください、で我々が評価をしてキチンとしたものであれば、市民風車ブランドとして取り扱って売っていきましょと。そのことが信頼をつくるということを皆さんわかってください、と。

非常に残念なことに、農家だけでなく、いろいろな業界や企業も、行政とか今までのやり方とかそういうものに頼りきって生産活動や地域活動をしているところが多くて、それを変えるためには、今言ったような、我々が消費者や市民という立場で生産者の方とおつきあいをしていく。そのことによって皆さんの気持ちを変えて、一緒に農業をつくる、そういうことがこれからできそう、というか、そういう流れができて非常に嬉しいと思っています。

**飯島** ありがとうございます。本当に嬉しそうですね。農業、農作物を作るって言いますが、少しパラダイムが変わってきたと思います。「信頼」という言葉がありました。お互いの中に信頼をつくるために、農作物を作ったり、農作物を売るためのコミュニティをつくらうという発想です。これは私たちが頭の中にすりこまれている、農業の人は農作物をつくってる、みんな当たり前前に思いますよね、学校でもそう教えられている。そういうふう思い込んでいるんですね。

農業をつくる、「百姓」という言葉がありますが、『百の姓』と書きます。百の才能があるという意味です。百の仕事ができないと農業ができない、というのと同じです。マルチタレントということですね、マルチジョブともいう。それぐらい農業というのは可能性があった産業であり仕事だったんですけども、さきほど言った指導により、あなたたちは土地を耕して農作物を作っていれば良いというふう、誰も言わなかったんですけど、思い込みで、私たちも多分まだ思っていると思うんですね。そういうパラダイムが少し変わろうとしています。

私たちの一つ一つの仕事が、何のために仕事をしているか。信頼を作るために仕事をしているんだというふう、ポジションを変えることによって、皆さんがやっている仕事、授業もそうですね。学校に行ったら先生からの話を聞くために授業に行くのではなく、先生との信頼を築くために行く、おそろしい生徒ですね。そうなっていくと、学校も変わるということです。私たちは信頼をお互いに担保しあう社会にはいつてきたと思うんです。

それまでは日本はお互いの信頼を担保するために、国家に頼ったり企業に頼ったりしていました。まさにこれからは信頼をお互いに作り上げていくという関係、お互いにどういうふう再構成していくかという時代に入ってきたと思います。続けて洪澤さん、お願いします。

**波澤** 今のお話の続きになるんですが、聞き書きの高校生たちが終わって次どうしようか、と言ったときに、そういえば自分のじいちゃんの話をもとに聞いたこと無いな、って話になるわけです。自分の両親の話もほんとに聞いたこと無いな。聞き書きをサポートしてくれる役所の人間や私たちNPOや企業の人たちが、高校生たちと一緒に自由に話し合うフォックスファイアー（狐火）倶楽部というのをつくって、飯島さんたちに一生懸命応援してもらっているんですけど。その場でみんな企業の間がいうのは、みんな自分のカミさんの話を聞き書きしたことは無いな、って必ず出てくるわけです。飯島さんもおっしゃったように、今まで夫婦という形でいかにもそこでコミュニケーション、信頼ができてるんだって思っていた時代ってのは、多分もう終わってくるんだらうなと。

聞き書きをやっていて高校生たちが変わってくるという話を今日はずっとしてたんですが、一番変わっていくのは、森の名人たちなんですよ。今でいうまさにお百姓さんたちなんですね。彼らは森の中で自分の衣食住全部賄うことができると言っていましたよね。とっても安心して生きています。ただ、ひとつには、彼らはお金にはならないのです。どんな炭焼きの名人でも、どんなマタギの名人であっても、いまの社会ではお金の評価されない。農業と百姓の違いというのはお金というものを介在しての概念ですよ。

彼らは、時代から遅れたもの、このまま自分は認められずに社会から死んでいくもの、自分の子供たちは一生懸命、農業をやっていてもお金を得ようとする農業をやるわけです。それから当然、全然違う職場についたりしている。そういう時、私これをやっていてつくづく思ったのは、人間が一番寂しいもの、悲しいものというのは、自分の存在を社会の誰にも見られずに、そして自分はこの社会に必要なと思って死んでいくということなんだと非常に痛切に思いました。その時に、自分を見てきて、目を輝かしてくれて、「名人ですね」と言ってくれる高校生が自分の前に突然現われる。それがどんなに生きることを勇気づけるか。

生きることを勇気づけることは、「本当にあなたを見てよ」「あなたを意識してるよ」ということ。これは、地球の裏からでもできることですよ。それをお互いが言い合うことが、人間が生きることで一番ハッピーなことなんだと、聞き書きを通じて本当に痛切に思ったんですよ。高校生たちはまた次の代の高校生たちとつながっていきます。そして、高校生たちと名人たちの枠の外に私たち企業やNPOの人間たちがつながっていきます。それはね、つながっていくことは基本的に「お互い生きてるね」「それを僕は見てよ」ということのネットワークがつながっていくことだと思うんです。

今まだ200人、今年で300人の高校生たち、名人たち、あわせて600人ですけど、これが、毎年200人、高校生100人、名人100人ずつ増えていく。その人たちが自分の両親や自分の奥さんの聞き書きを始めてくれる。そして自分のじいちゃんばあちゃんたちの話を聞いてくれる。お互い、生きてるよ、生きてるよ、生きてるよネットワークが広がっていく。そうするとさきほど僕が言ったような「感謝」だとか「愛」だとか、普通まともに話せるような、要するに照れでなくて表で普通に話せるような社会に多分なってくるんだらうな、と。そうしないと多分、環境問題とか持続可能な社会は絶対築けないんだらうなという感じは思っています。

**飯島** ありがとうございます。人は、つながりあってこそやっぱり人として自分を自覚できるんだな、ということなんですね。話はちょっと飛びますが、僕はニューメキシコ州のペトリ

ファイド・フォレストというところがあるんですね。日本語訳すると「石化された森」というところなんですけれど。水平線のかなたには石、大きな木が、一回古代の森が倒れて、水が入って水没した木の中にミネラル、つまり川の水の石の成分が入って、それが全部つまりめのうの木が水平線の向こうまで続いている。もちろん国立公園になっているんですけども、その中で一匹のトカゲに会ったんですね。そのトカゲが「やあ」というのですよ。ちょっと変な話ですが。そのぐらいに命と命は呼応しあう。日本に帰ってきてこの話をすると、「トカゲと話したなんてまた飯島さんまた変なこと言っている」というふうに言われるかもしれませんが、事実、私たちの命と向き合ったときに必ずそこに何かの「双方向性」があるということなのです。

私たちはコミュニケーションをしないと生きていけない動物だと言うこともよく分かります。それから、「おまえもそうなのか」という感覚があります。そういった感覚を持ったのが、先ほどちょっと多田さんから出た話なのですが、南方熊楠という方だと思います。これも話をすると2週間くらいぶっ通しで話さないと駄目な話ですけど。命を巡って対話をしていくと、お互いの命の存在として対話をしていくという時代になってきているのかなと思います。今の洪澤さんのお話から伺えました。では続けて多田さん。

**多田** 持続可能な社会の話が今日何回か出てますが、飯島さんと最近、「ただ持続するだけの社会って面白くも何ともないし、つまらないね。何が持続すればいいの？」という話をしています。さっき上田さんがちょっと紹介してくれた持続可能性指標は実はそういうところも狙っていてね。「持続するって何？ どういう物差しで測ったらいいの？ という、社会がいい方に向かっているか悪い方に行っているかの簡単な物差しを作って、日本がどういう方向に行っているかを測ってみましょうよ」というプロジェクトです。これはある時期が来たらオープンにしますが、こちらで一方的に決めちゃうと言うよりも、ある種の参加型のプロジェクトにデザインしていきたいなと思って仲間と一緒に進めています。

それからこれは、日本の地域やコミュニティが市町村合併の問題などがあってかなり大変な時代になってきていますよね。2年半のJFSの活動を振り返ると、Think the Earthさんもそうなのですが、企業とのパートナーシップは非常に厚くて、かなり企業といろいろ連携しながらやってきているのですけれど、まだ地域や自治体とのパートナーシップ作りは全然できていなくて。実はその辺のところを三上さんと何かできないかみたいな話もしています。青森がマイブームになりつつあるんですけど。持続可能な青森という観点で言うと、この間三上さんから聞いてややショックだったのは、わらの話を三上さんがしてくださって。稲を刈り取った後のわら、自然循環の観点から言えば土に鍬込んでしまって土の分解で自然に土に返すのがいいらしいのですが、青森では冬が早く来るといふ事情があって自然分解するサイクルに乗らないらしいのです。そうすると鍬込むことができないので燃やしている。燃やすとやはりにおいの問題だとかもちろんCO<sub>2</sub>を排出するだとかで、非常に困っていらっしゃるといふ話を聞いて。僕は、すぐそのソリューションがあるというわけじゃ無いのですが、こういった問題というのは、農家だとかそういうところだけで考えるっているより多分、いろんなNPOだとか企業だとか、それこそ多様性ですよ、多様なグループが参加する中でこういうもの一つとってもソリューションがでてくるというふうに思っていて。いま、市町村でも環境に熱心なところは、例えばISO14001とか環境マネジメントシステムを作ったりとかしてるんですけど。具体的に持続可能なまちづく

りを市民参加型でやっているところというのは、無いとは言いませんけど非常に希有ですよ。こういう言い方は失礼かもしれないけど、多分そういうことをする人材とかノウハウとかソフト的な技術が無いのだと思うんです。何かそういうところで、今後、JFSとは限らないけれどもNGOとのパートナーシップみたいなこともデザインできればいいかなという気がしています。

もう一つ。こないだこれも飯島さんと一緒だったんですが、ある建設メーカーさんのステークホルダーダイアログを半日くらいやったのです。その中で一つ思ったのが、環境報告書。非常に環境にいい建物を彼らなりに苦労して造っていて、あちこちで環境に配慮した建物のスナップショットを、環境報告書にババァッと「どうです！」みたいな感じで出ているのですが、全然おもしろくないのです。何でおもしろくないのかなと思って、いろいろ話していく中で、「いやこれは実は、施主からあまり環境にお金かけちゃいけないというなかで、いろいろ環境にデザインしておいた方が10年20年のスパンでいいですよ」という説得をしたりとか、あるいは、かなり大規模なものを作るのでコミュニティの人たちと非常に苦労しながら話をして説得していったりとか、そういう話を聞かせてくれて。僕が思ったのは、「何でそれを書かないのか」と。言いたいのは、プロセスの方ができあがったものよりもおもしろいのです、遙かに。僕はやっぱりプロセスを可視化するようなことも、これからウェブだとかコミュニケーションの中でやっていきたいし、プロセスの中にこそヒントがあるんじゃないかという気がしています。

それから、さっき洪澤さんの話を伺って刺激を受けたのですが、上田さんも同じことを言っていましたけれども、発信と言うことに我々目線が行きがちですが、受信する力というものを非常に感じました。これは全然持続可能性とは関係ないのですが、非常に会社のパフォーマンスがいい企業の方とこの間ある場所で話をして。その会社は、非常におもしろいんですが、マネジメント研修の中に「傾聴」というプログラムを入れているらしいんです。傾聴って耳を傾ける。だいたいもうその世代というのは自分の価値観に凝り固まっていて耳を傾けない。権力も持っていますから、人の話を聞かずに押しつぶす。そういう人たちに対して、いかに人の声を聞いてやっていくことが大事か、かなりきちんとしたプログラムをやっていて、「価値観が変わる」というんですよ。これは持続可能性とは関係ないんですが、今日非常にインサイトフルだったのは、受信するとか、聞く力の大切さみたいなこと、そこをウェブの中でデザインすることの大切さを私自身は一つ大きな学びとして経験させて頂きました。

**飯島** 最後時間がオーバーしそうですけれども、上田さんお願いします。

**上田** 今日ここに集まって話して頂いた方々というのは日々すごいアイデアが生まれていて、すごくおもしろい活動をどんどん思いつかれて実践していて、しかも皆さん楽しそうに生き生きとした目をされていると。これはすごく大事なことじゃないかと、今日何となく思っています。最近、日本は閉塞感があるのではないかと、先行きがどうもとか、子供たちにも未来がどうのこうのとか、どうもマスメディアとか見ているとそういう話題が多いと思うのですけれど、僕はこういう大人や、洪澤さんのところで変わって、目を輝かせるようになった子供たちがいっぱいいると思うんですよ。むしろそういう人たちに僕たちはもっともっと注目をして光を当てて、Think the Earthでも紹介していきたいし、自分たちもそういうことをちゃんと自信を持ってできるように、そしてまた、そういうひとたちとの信頼関係も作っていったり、一緒に協働しながら

ら何かを作っていたりとかしたい。

失敗してもいいので、失敗体験をいろいろ重ねていくとか。失敗しながらへらへら笑っていたいというのがあるんですね。ホントにいい失敗というのは学びがものすごく多いので。さっきも「育つ」という話がありましたけれども、育ったなって思うっていうのは大抵、成功しているときに感じるのではなく、いっぱい失敗をしたときとか、いい失敗をしたときに次どうしようかと考えている自分が、そこに成長っていうのがあると思います。失敗がいろいろな意味で許される場作りということも重要だし、ネットはそういう意味では素晴らしい。試行錯誤をしていい、スクラップ・アンド・ビルドがいくらでもできちゃう。僕は昔テレビ番組を作っていましたけれども、これはできてしまったものを二度と変えられない。それからイベントだと2週間くらいあれば最後は少しずつなら改良していけるけれども、いずれ終わってしまう。でもネットの上のことならいくらでも、「この間考えていたこと、考えが変わったんだ」ともいえますし。いろいろな意味で試行錯誤できる場というのがネットの場でもある。そういうことも重要だなと思います。そういう意味では僕らもいろいろ失敗を重ねていきたいなと思います。未来に向けてのいい失敗を。

あとは、なかなかつながれないところとつながっていききたいなという気持ちがありますね。共感する人たちとつながることというのはできてきていると思うのですが。例えば、以前、セバスチャン・サルガドという写真家が、難民の人たちを撮った写真展を東京でやっていました。そのときに、彼は子供のポートレート写真をいっぱい撮っていて、最後にばーっとならんでいたんですね。その子たちがものすごい目をしてカメラに向いている。透明な、というか澄んだ、ものすごく力のある目で。サルガドはその目を見て子どもたちの写真を撮り始めたのですけれども、サルガドのコメントが今でも印象深いのですが、「子供たちは、『僕はここにいる』ということをお伝えしようとしている」というんです。誰も見てくれないわけです。でもそこにサルガドという写真家が来て写真を撮る。ということは、その写真を全世界の人が見る可能性があるわけで、そこに向かって、もしかしたら明日死んでしまう子供たちかもしれないけれども、世界に向かって何かを見る、ということを通じて、「僕はここにいるんだよ」と言っている。そこに対して何かできないか、というのが究極的にはやってみたいことです。そういうなかなかつながれないところ、そこを忘れずにいくというのがすごく大事なことかなと思っています。

**飯島** 目を見合うということは日本の言葉で、「まぐあう」という言い方をします。「まぐあい」は目を見合うということと、もちろん男と女が抱き合うということも「まぐあい」というのですが、そこにやはりお互いの存在、命の存在というものをただ感じ合う、という社会、日本の文化がありました。

だんだん話がいいところに来ていますが、毎回時間がないということで、本当はあと3時間ぐらい欲しいのですが、もちろん男と女が抱き合うということも「まぐあい」というのですが、そこにやはりお互いの存在、命の存在というものをただ感じ合う、という社会、日本の文化がありました。

「双方好」よろしくお願ひします。